

大ちゃんの門出

か
ど
で

赤木由子著

鈴木たくま絵



大ちゃんの門出

赤木由子著 鈴木たくま絵



913 赤 木 由 子

大ちゃんの門出

新日本出版社 1981

173p 22cm (新日本少年少女の文学12)

あかぎよしこ
赤木由子

1927年～1988年。中国、鞍山常盤高女卒。敗戦後引揚げ、新聞・雑誌記者をしながら小説や児童文学を書く。日本児童文学者協会、日本子どもの本研究会、児童文学研究会会員。著書に「はだかの天使」(新日本出版社)「二つの国の物語」(理論社)「草の根こぞう仙吉」(ほるぷ出版)などがある。

すずきたくま
鈴木琢磨

1918年横浜で生まれ、東京で育つ。児童出版美術家連盟、現代童画会所属。「はだかの天使」(新日本出版社)「ドンが見た風の鳥」(小峰書店)「すてきなきかん車」(旺文社)「ちさ・女の歴史」(理論社)などの作品がある。

新日本少年少女の文学12 大ちゃんの門出

1981年1月25日 第1刷発行©

1989年12月20日 第10刷

著 者	赤 木 由 子
画 家	鈴 木 琢 磨
発行者	山 本 功

便番号 151 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-25-6
発行所 株式会社 新日本出版社
電話 営業 03 (423) 8402 編集 03 (423) 9323
振替 東京 3 - 13681
印刷・光陽印刷 製本・小高製本

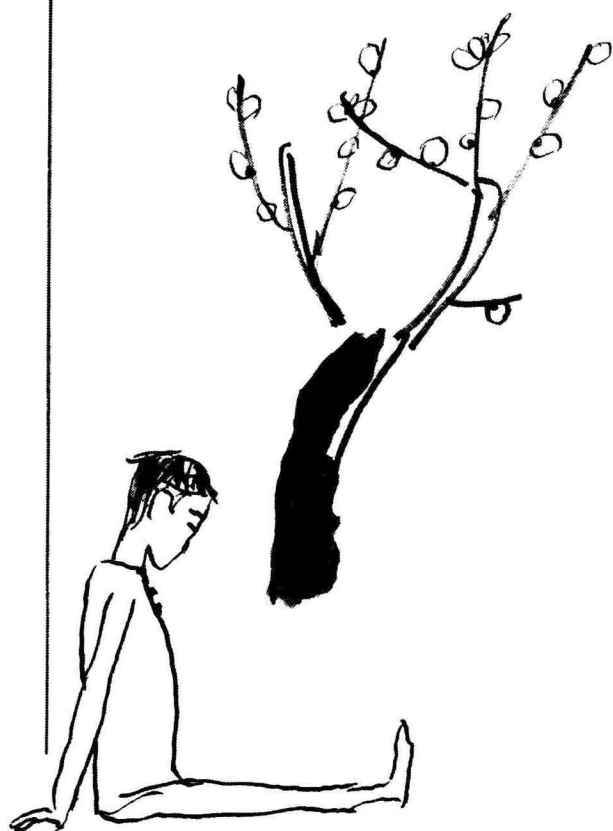
落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。

この本の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布することは、法律に認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。あらかじめ小社に承諾をお求めください。

ISBN4-406-00737-7 C8393

Printed in Japan

もくじ



1 キンモクセイの匂う日び 5

2 大空へ あのカラスのように 19

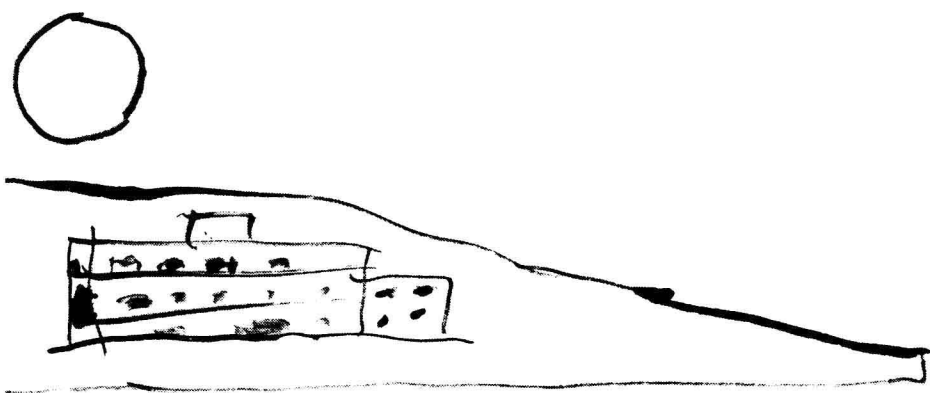
3 お守りのコウモリ傘 34

4 風にとぶ十万円 47

5 やけこげた夢 58

6 けがをおそれるな 73

7 いやなあいつ 87



8 世のなか^{せいじょうかぶしきがいしゃ}清浄株式会社

100

9 大介^{だいすけ}どろぼうの見はりになる

113

10 いちどに五人が首になる

128

11 白い小さなくつした

139

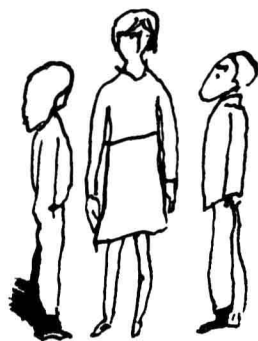
12 仲間^{なかま}のよぶ声

151

あとがき 171



装丁・さし絵 鈴木 たくま



Ⅰ キンモクセイの匂う日び^{にお}

生徒^{せいと}が九人しかいない三年^{ジエイぐみ}丁組^{だいすけ}の大介^{だいすけ}たちは、校舎^{こうしゃ}の一階^{いっしょう}のはしにある教室^{きょうしつ}で、男子^{なんし}は本立^{ほんだて}てを作り、女子^{じょし}は絵^えを^かいていた。

大介^{だいすけ}たちが小さな本立^{ほんだて}てを作りはじめて、もう一か月以上^{いじょう}たつのに、半分以上^{はんぶんいじょう}できあがったのは、丁組^{ていぐみ}でいちばん勉強^{べんきやう}のできる、のっぽの畑山^{はたけやま}利夫^{としお}ぐらいで、あとの者は、まだ、もたもたやっていた。大介^{だいすけ}たちは中学三年^{ちゅうがくさんねん}なのだが、クラス^{クラス}の九人^{きゅうにん}はそれぞれに、ちえおくれたとか、足^{あし}がマヒ^{まひ}しているとかの障害^{しょうがい}をもっていた。

腰^{こし}から下^{した}がマヒ^{まひ}しているためか、ふとりすぎて、目のほそい中島^{なかじま}良和^{りやかず}は、介助^{かいじょ}の佐川^{さがわ}先生^{せんせい}に、車^{くるま}いすからおろしてもらって、ゆかにべったりとすわりこみ、板^{いた}きれにあてたノコギリを、そろり、そろりと、ひいている。

まじめにんげんの藤田^{ふじた}健三^{けんぞう}は、みんながたたいているカナヅチの音^{おと}に、

「うるさいよ、うるさいよ」

と、口のなかでいいながら、じぶんも、カナヅチを使^{つか}っている。健三^{けんぞう}は小学校^{しょうがっこう}の五年^{ごねん}生^{せい}まで、ふつう

学級にいて、勉強もよくできていたのに、オートバイにはねられて、あたまを強くうったのがもとで、障害児学級にはいつてきたのだった。

小森四郎と前田清子は、たいくつしてしまつて、「チヨウチヨ、チヨウチヨ、なのはにとまれ」と、うたいながら教室をとびまわりはじめた。

大介たちの担任の、日野厚子先生と、日野先生を手つだっているわかい佐川浩二先生は、その二人を追いかけるのに、いそがしい。

「ほらほら、ノコギリをふみつけたらだめよ。おゆうぎは体育の時間にやろうね」

日野先生の、きりっとひきしまつたかおには、こまかい汗のつぶが、いっぱいうかんでいる。

大介は、二枚の板を直角にあわせた角に、さきに小さいクギをつきさし、カナヅチで、かるくたたいていた。すこしでも強くなつたと、クギは、くつと、ななめになつてしまふ。

だんだん、じれったくなつて、大介の、すこしいびつなほそいかおが、ますます、ゆがんでいく。

「ええい、こんちくしょ」

カナヅチを大きくふりあげて、ちからまかせにうちおろした。

「いてえ！」

クギをうつかわりに、じぶんの指をたたいてしまった。思わず口にくわえた左のひとさし指を、目のまえにだしてみると、血まめができている。

「おれ、もう、本立てなんか作らないよ。買ったほうが早いもんな」

もんくをいっていると、日野先生が、

「井上^{いのうえ}くん、あんたは、どうして、そんなにかんしゃくをおこすの、来春^{らいしゅん}は卒業^{そつぎょう}だというのに、すこしは、じぶんの欠点^{けってん}、なおしなさいよね」

と、いいながら大介^{だいすけ}のそばへきた。

スポーツウェアを着ている先生が、ちかづいてくるにつれて、むせかえるような、いいにおいがただよってくる。大介は、(日野^{ひの}先生はきびしすぎるけど、心がきれいだから、からだまでいいにおいがするのかな)と、思った。

中学三年生といっても、ちびでやせっぽちの大介は、よく小学生とまちがえられていた。すこし、いびつな^{なかおの}かおの、こい眉^{まゆ}をあげて、大介がいった。

「先生は、香水^{かうすい}をバケツ一ぱい、かぶってきたんじゃないのかね」

大介をしかりうとしていた日野先生が、つい、わらってしまう。

「なにいつてんの、香水みたいな高いもの、先生、一つだってもってないわ」

すらりと背^せの高い先生が、強くひかる黒い目を、あけはなしてある窓^{まど}の外にむけて、
「大介くん。そのにおい、キンモクセイでしょう」

と、いった。

そのキンモクセイが、きゆうに、しわがれた声をだした。

「大ちゃんたち、あとで、花壇^{かだん}の手いれを、みんなでやろうね」

キンモクセイの下に、おじいちゃん先生の竹田^{たけだ}先生が立っていて、そこから、教室の大介たちに声をかけたのだった。竹田先生は、障害児^{しょうがい児}学級^{がくきゅう}を二十年間もうけもってきた先生だった。

「日野先生、これ、花瓶にさしておくといいよ。ほらほら、四郎と清子ちゃん、そんなにさわぐんじゃないよ」

竹田先生が、窓ぎわへ走っていった清子に、キンモクセイの枝を一本、わたした。

「ふわー、このお花も、みつがあるんでしょ」

清子が、長くのばした舌で、ぺろぺろ、花をなめまわす。

「それ、ぼくのだよ」

四郎が清子の手からキンモクセイの枝をうばうと、小さなダイダイ色の花を手でむしって、口にいはじめた。

「あーん。たべちゃだめえ。みつをすうのよ」

泣きだす清子に、ふとりすぎて目のほそい良和が、かおをあげて、

「清子ちゃん、四郎くんはたべちゃいたいくらいに、お花がすきなんだから、がまんしてやんな」と、いった。大介は、

「まったく、清子も四郎も、チョウチョウみたいになやつだな。花を見せたらさいご、花のみつをなめたり、たべちゃったりしてさ」

と、ズケズケいいながら、じぶんは、鼻のあなをいっぱいひろげて、秋の午後の陽に、こんもりと咲いているキンモクセイのにおいを、胸にたっぷりすいこんでいた。

四郎と清子は、こんどはキンモクセイの枝を、じぶんがこしらえた花瓶にさすのだといいはって、けんかをはじめた。

1 キンモクセイの匂う日び

教室のまわりの棚には、大介たちが、粘土をこねて、美術の女の先生に教わりながら、カマで焼いた花瓶だの、ペンダントだのが、ずらりとならんでいる。その花瓶のなかで、口がよこをむいたりして、いびつなのが三個ある。大介と四郎と清子がつくったものだ。

「はらはら、キンモクセイ、もう一本あげるから」

竹田先生が、もうひと枝切ってよこして、四郎と清子のけんかをやめさせた。

授業のおわりのチャイムが鳴った。大介は机の下においておいた紙ぶくろをとって、ろうかへかけだしていった。紙ぶくろには、大介の家の近所に住む、アイちゃんという子が、じぶんでつくったスリッパがはいっている。アイちゃんはそれを三年B組の桜井みちかにわたしてほしいと、大介にことづけたのだった。

大介より一つ年上のアイちゃんは、去年の春、東京の杉並区にあるこの中学校のJ組を卒業していた。三年生は去年も今年も十クラスあって、A組、C組ときて十番めのJ組といえば、障害児学級ということになっている。

大介は、ろうかにあふれでた生徒をかきわけて、みちかのいる三階へいそいだ。三年B組の担任は岩村先生で、大介はその先生はきらいだったが、B組にはみちかのほかに、大介と仲よしの伊東正隆もいる。

両足がすこし外がわをむいている大介は、いそげばいそげほど、黒い長ズボンの足が、おどるようなかっこうになる。

ようやく、三年B組についた。あいている教室のまえの戸から、なかをのぞくと、そこも、生徒の

あらましは校庭へでてしまつて、四、五人の女生徒が、おしゃべりをしながら、黒板のチョークの字を消していた。その子たちのなかに、みちかはいなかった。

大介はなにげなく、女生徒が消そうとしている、黒板の幼稚園の子のいたずら書きみたいな英語を見て、

「おれには、さっぱり、よめないよ。みちかちゃんや、正隆くんは、たいしたもんだ」と、大げさに首をふつた。

黒板を消しおわつた女生徒たちが、大介の立っている戸口から、ろうかへでていこうとした。大介はあわてて声をかけた。

「あのう、桜井みちかさん、どこへいったか、しらないか」
声をかけられたその子が、

「キャーッ」

と、すさまじい声をはりあげた。

大介のほうがおどろいてしまった。それだけではなかった。そこにいた子が、そろって、じぶんで、じぶんの胸をだいて、

「そばへこないで。だきつかないで、いやー、いやー」

と、さけびたてた。

大介は、うろたえた。うろたえながら、ひっしになってどなっていた。

「お、お、おれ。だきついてなんか、いないだろう。おれは、ただ、みちかちゃんに……」



大介だいすけのうしろから、男の先生が、

「これ、おまえたち、だきつかれてもないのに、へんな声、たてるんじゃない」

と、その女生徒じよせいとたちに注意した。

みちかたたんにん いわむちちの担任の岩村先生だった。

首をすくめて、べろっと、舌したをだした女生徒たちに、岩村先生は、

「おまえたち、J組ジェイぐみの子には、かまうんじゃないと、いつもいつてるだろ」

と、おだやかにつけたしていった。

そのいいかたが、大介のあたまに、カチンときた。大介は、ほおをふくらませ、とがった肩かたをそびやかせて先生にかみついた。

「先生。おれ、おもしろくないぞ」

「なにが」

「なにがって、あの、その……」

うまくいえなくていらだった大介は、ろうかのゆかを足でトントン、ふみつけた。岩村先生は、ただ、「J組の子には、かまうんじゃない」と、いっただけだった。それなのに、なんとなく、カチンときたのだ。それに、へんな声をあげた女生徒たちにも、あやまらせないと胸むねがおさまらない。むしろくしゃするのに、大介のかおは、もごもごといびつに動くだけだった。

岩村先生は、大介がくやしがつているのに気がつかないで、教室へはいつていった。女生徒たちも、なにごともしなかったように、トイレのほうへ、しゃべりながらいつてしまった。

つぎの授業のはじまるチャイムが鳴った。大介は、三年B組の教室からはなれると、階段の手すりにつかまりながら、おりていった。

校庭にでていた生徒が、階段いっぱいにひろがって、あがってくるのといきあった。もくもくとせりあがってくる黒い制服のなかから、

「井上くん」

と、声をかけてよこす男の子や、女の子がいる。

大介は、わりに笑顔をつくって、その子たちにわらいかける。声をかけてよこすのは、大介の親学級の、三年D組の川井くんたちだった。親学級というのは、音楽や体育の時間など、J組の大介たちがそれぞれの親学級になっている教室にでかけていって、いっしょに授業をうけるクラスのことをいう。

「大ちゃん、どうしたの」

また、声をかけられた。サッカーの選手で、生徒会の副会長もやっている伊東正隆だった。

「大ちゃん、ころぶんじゃないよ」

からだの大きい正隆がそばへきて、大介が階段をおりるのを、手つだおうとした。

大介は、正隆に、胸のむしゃくしゃをぶちまけたくなったが、やはり、うまくいえそうもないので、ふにゃと、わらってみせた。

「だいじょうぶさ。おれ、一人でおられるよ」

「気をつけなよ。足をおったりしたら、たいへんだからね」

「へいきだってば」

やさしくされると、かえって、なみだがでそうになる。

大介は、いきおいをつけて、階段をおりてみせた。正隆は安心してらしく、ととのったかおを、にこっとさせると、階段をかけあがっていった。

一階のろうかにおりた大介は、J組にもどる気がしなくなり、校庭へでて、そのまま家へむかった。

岩村先生のいったことばや、「だきつかないでえ」と、さけんだ女生徒たちへのにくしみが、大介の胸の底で、いぶりつづけていた。

(どうして、おれは、こんなにばかにされなきゃ、ならないんだ)

なん十人もいる中学の先生たちのなかには、大介がほかのクラスの子と、けんかをしたりすると、大介をつかまえて、

「おまえらJ組のやつらは、ふつう学級の子と、口をきくことないんだ」と、どなりつける先生もいた。

歩いていくうちに、そんなことまで思いだして、しまいに、胸がはりさけそうになってきた。

校門をでて、大介ののろした歩きかたで十五分ほど、うら通りをいくと、庭はひろいが、おんぼろの木造の二階屋が見えてくる。それが大介の家だ。大介は、玄関の戸をらんぼううにおしあけると、ふくれつつらのまま、家のなかにあがっていった。

「大介、また、なにかあったのね」

庭の見える部屋で、ふとんに寝ていたお母さんが、からだを起こした。大介は、ふとんのそばにと